



奇妙な世界な
のに青い空

本島 としや

電車が地の底から太陽を引きずり出す。

柔らかな風が車内を流れれば、

新しい朝がサジタリウスの矢のように降り注ぎ。

心地よいリズムに合わせて体をシートを預ける。

星はいつの間に逃げてしまい、眠れぬ夜は加速度的にどこかへ追いやられていく。

こくりこくりと櫂をこぐ。

狭い電車の箱の中。

途切れ途切れの意識の中で。

やがて誰も疑うことのない朝がやってくる。

時間が俺を追い抜いて一人歩きしている。

ねえ。

ねえ――。

聞かせて――。

私だけに聞こえる声で。

いつか部長が言った。

部長が失踪する前だ。

俺はそれになんと答えたのか覚えていない。

部長が何を知りたかったのか覚えていない。

意識が戻る。

電車の扉が深呼吸をするように開く。まだ俺の目指す駅ではない。

誰一人いない静かな電車は、深呼吸を終えると再び走り出す。

そういえば高校生の頃、夜中に道を歩いていた時、一人のホームレスに出会った。

老人である。

何ヶ月も洗っていないと見える髪の毛は汚れで灰を被ったような色をしていた。雑草のように好き放題伸びきった髭は、縮れてくしゃくしゃになり、くたくたになった上着を羽織っていた。手に持った一本の缶ビールと、口に啜えたタバコを交互に楽しみながら、排水溝の脇に座っていた。

「おい、あんた。病んでるぜ。俺もお前も病んでるぜ」

何かを吹っ切った様に、豪快に笑いながら言うのである。その声には吐いてる台詞と裏腹に、胸のすくような爽やかさがあつた。

「病んでるぜ。俺もあんたも病んでるぜ。けどな、俺は最近知ったのだ。いつか空が引っくり返って、星が落ちてくるんだ。おい、にいちゃん。若けえのに何を疲れた顔をしてるんだい？

もし良かったら俺の話しに付き合う気はねえかい？」

ホームレスの老人は、俺を手招きする。

どこかで猫が鳴いた。

冷めた声で――この爺は病気です。

応える様に別の猫が鳴いた。

背筋の凍る不気味な声で――この若者も病気です。

にゃあにゃあ、わあわあ、喧しくしている。

「一つ、俺の話聞いていかねえかい？ 見ちまったんだよ。とんでもないものを」

老人の言葉を黙殺して、俺は再び道を歩き出す。

ビールの缶が乾いた金属音を立てて、俺の足元に転がりついた。老人が投げ捨てたのである。

「俺の話聞きかねえってんなら――」

俺は足元の缶を拾って、近くのゴミ箱に放り投げる。

戯言の相手は出来ぬ。老人の言うように、確かに彼は病んでいるに違いない。

ホームレスは一際大声で、猫の馬鹿騒ぎに負けないように、腹の底から声を出した。

「祝福を――。あんたの背中に祝福を――。世界があんたに幸せを与えるように祈っているよ」

――君に幸あれ

ざわざわと騒ぐ波の音で目が覚める。

いつの間にか車内は人で賑わっている。

女子高生、会社員、老人、老婆、大学生。

混雑してるな。と考えるか考えぬうちに俺は再び、うとうとし始める。

病気は治らないものだ。と、唐突に声が聞こえる。

果たして夢か真か。白昼夢の中の俺にはどちらか判断できぬ。

でも多分、車内に居合わせた誰かが似たような言葉を発したのだろう。

不治の病ならあるだろう。完治しない病気もあるだろう。

だが、おおよそ病気は治るように思える。

病気は治らないとはどういう意味だろうか。

国。人ではなく社会。

すべて国家は大病を抱えている。

それはきっと資本主義国家であれ、社会主義国家であれ、王国であれ、宗教国家であれ大勢の人間が少数の人間に管理される仕組みの中では必ずどこかに歪が入り、そこから菌が濃んでしまうものなのだ。

だから病めるのは俺でなく、あなたでなく、仕組みなのだ。

ああ、でも治す方法は一つだけある。

全てのホモ・サピエンスを地球上から消し去る事だ。

それだけが唯一この星を病気から救う術なのだ。

でも氷河期が訪れるか巨大な隕石が落ちてくるかしない限り実現不可能だろう。

夢うつつの輪郭の無い考えだが、いつかの老人に教えてあげたい。

治す事が出来ぬならば、病気と共に生きるしかない。

そう思う。

うつらうつらと思い返していると、電車はやがて高校の最寄り駅――兼平駅――に到着し、俺は懐かしい。久々の故郷である。高校を卒業して、俺は大学の関係で千葉へ引っ越した。学生時代には正月とお盆くらいは帰省していたのだが、そのまま向こうで就職し、以来数年間この街には帰ってきていない。

駅前の風景は多少変わっている。新しい店が古い店を追い出している。しかし、街のもつ雰囲気、空気は当時のままである。

ポケットからメモを出す。

『喫茶・新世界』

なんだか風俗店のような屋号だが、本当にただの喫茶店である。俺も二、三回利用した事がある。無愛想な髭もじゃの店主が、やはり無愛想にコーヒーを淹れ、愛想の良い奥さんがテーブルまで運んでくれる。コーヒーの味は悪くない。奥さんが毎朝作っているというケーキはそこそこ旨い。

店内は狭く、四人掛けの机が四つだけ置いてある。

四組の客が来れば店はもう満員だ。しかしだからこそ、奥さんは客の顔を覚えてくれていて、俺も二度目に来た時、軽く会話を交わす程度の付き合いになる。

小さい店であるが故に、ひそひそ話をしない限り、喋り声は店中に聞こえる。

そういう店である。

駅から歩いて十分かからず到着する。

重たい木の扉を開くと、リンと心地良い音が鳴り響く。

喫茶店で流れていた音楽はチェンジ・ザ・ワールドだ。

喫茶・新世界で流れるチェンジ・ザ・ワールド。

俺は以前どこかでこの曲を聞き、かなりお気に入りになったのだが、生憎誰の曲なのか知らずにいた。

別の機会に、エリック・クラプトンの曲だと知った。しかし一晩たつと、語感だけは覚えていたのだが、誰の曲だったか忘れてしまった。『エリ・・・トン』

これはいけない。覚えているうちにCDを買って来ようと、翌朝店が開くのも待たず家を飛び出した。

幸いにも彼のCDを見つけた。その店には彼のCDが一枚しか置かれていなかった。『チェンジ・ザ・ワールド』は収録されていなかったが、あのような素晴らしい曲を書くのだから、他の曲も素晴らしいに違いないと即座に購入した。

毎日CDを聞いていた。お気に入りの一枚になったのだ。

ある日、友人にこのCDは『チェンジ・ザ・ワールド』を歌っている人のものだと紹介したら、友人は首を捻ってこう言った。

「エリック・クラプトンじゃなかったっけ？ チェンジ・ザ・ワールドは」

俺の好きなCDのジャケットにはこう書かれていた。

――エルトン・ジョン

エリック・クラプトン、エリ・・・トン、エリトン・・・トン、エルトン・・・トン、エル

トン・ジョン。そういうものだ。

無愛想な店主がふてくされた子供みたいに、いらっしゃいと言う。同時に愛想の良い奥さんが笑顔でいらっしゃいと言う。

店の一番奥の席に数人座っている。元新聞部の部員たちである。

「お。来た来た。俺は待ちくたびれてコーヒーを五杯もお代わりしてしまったぜ。一杯十五分換算でな」

笑いながら伊藤先輩が俺をからかう。

「あれ？ 集合時間間違えました？」

腕時計を確認すると、約束の時間の五分前である。

「単に太郎が早く到着しただけだよー」

コーヒーカップに口をつけながら、遠藤先輩が突っ込む。

この辺りのやり取りはまるで変わっていない。ただ、二人ともやはり大人びて見える。遠藤先輩の仕草からはおっとりした雰囲気というより、落ち着いたという言葉の方が似合う。伊藤先輩も昔のように無闇やたらとはしゃいだ様子は無く、その姿勢、表情からは確固たる芯が一本貫いているかの如き力強さがある。

机にはケーキの乗った皿が偉そうに並んでおり、佐伯がそれを必至に食べている。

坂本先輩がそんな様子を眺めながら、静かにコーヒーを飲む。

「何注文する？」と訊ねるのは店の奥さんである。

「ホット一つ」と言って坂本先輩の隣に座る。

「ホット一つ」奥さんの声が店内を駆け回る。

だが、厨房の髭店主は小さく頷いただけだ。奥さんは再び無愛想な店長に聞こえるように、「ホット一杯お願いねー」と大声で繰り返す。すると漸く店主は「はいはい、そんな大声で言わなくても聞こえてる。ホットね」と無愛想に返す。

その様子を、伊藤先輩がじっと眺めている。何かを思い出すように。

「どうかされたんですか？」

俺が尋ねると、伊藤先輩は、かぶりを振って、

「いや、なんでもない……。ここの店長、昔会った事がある気がして」

「偶然ですね。実はわたしも、何処かで見た顔だなあって思ってたんですよ」

いつも無愛想な店長が向こうから話しかける。

珍しい事もあるものだ。

「あ、やっぱり店長さんもそうですか？」

「そうですねえ、どこであったのか分からないですけど」

「でも多分――」

「気のせいでしょうね」

二人の言葉が不思議とハモる。

部長こと平野香織は高校を卒業後すぐに行方不明になった。誰にも理由を告げず。

明らかなのは、部長本人の意志に則って行われた失踪だったということだ。

主の居なくなった部長の部屋の机には一筆『何年か旅に出る。適当に帰ってくるから探さないで』と書かれたメモが残っていた。

俺たちが高校以来数年ぶりに集まったきっかけは、失踪したはずの部長から届いた一通の手紙である。手紙は近況を伝える気遣いも、失踪した理由を告白する言葉も無く、ただ殴り書きされた文字の羅列である。

『矢神さんを殺した犯人が分かった。エスパー伊藤と佐伯から、矢神さんが死んだ日に起きた出来事を聞いて。わたしも行きます。日時は――』

ところが、部長の姿は見当たらない。

「あの、部長は？」

訊ねると、坂本先輩は肩を竦め、

「今朝家に電話があって、遅れるってさ。先始めておいてって」

丁度俺の目の前に熱いコーヒーが差し出される。

伊藤先輩が、

「さて、どこから話そうかな」

とらしくないほど神妙な顔をして言う。

その表情はどこか哀しげでさえある。

◆
雨は止む気配を見せない。湿気が視界を覆っている。

僕は、佐伯に背負われて家に向かっている。体臭がきついのは我慢するにしても、汗と雨で濡れた佐伯の体は、脂でヌルヌルしていて溜息が出る。

怒涛の勢いで降り注ぐ雨を、僕は正面から捻じ伏せた。全身の力を振り絞って、空間を歪め、雨を避ける事に成功したが、その代償にその後二日ほどトイレで用を足す事さえ億劫な状態である。……ちょっと大げさな表現かも。本当は二時間ほど休憩しさえすれば自力でトイレぐらい行ける。だから翌朝には、筋肉痛的疲労が残っているとしても、日常生活を営む上でさほどの支障はない。

ああ、それにしても彼が巫女のバイトをしているのはどうにも許しがたい。

巫女への冒涇だ。巫女への冒涇はひいては神への冒涇だ。つまり佐伯は冒涇的な人間なのだ。冒涇的人間とは即ち自然の摂理に相反する生物だ。

「この冒涇的生物が！」

つい叫ぶ。

「あの一。伊藤先輩、聞いてまつか？ おでの話。フーフー」

僕が巫女服についてあれこれ考えをめぐらしている間、どうやら佐伯は何か話していたらしい。無論、巫女の事で頭が一杯だった僕は、

「聞いてない。そんな事より雨が冷たすぎるぞ」

「今の雨の温度は2℃でつから。ちなみに気温は、……」

「ああ、教えてくれなくても良いよ。2℃だろうが3℃だろうが、冷たい事に変わらないんだから。さあ早いとこ家に帰ろう。時間があるなら僕がお礼に晩御飯をご馳走しようじゃないか」

僕の家では当番制で晩御飯を作る。たまたま今日は僕の当番の日だ。父親は仕事で帰ってきていないだろうから母親と妹の分に僕を含めて三人前作る。三人分作るのも四人分作るのも労力は大きく変わらない。

「あの、ありがたいでつけど、その体でご飯なんて作れるんでつか？」

「それもそうだ。お前頭いいな」

晩御飯作れるなら僕は僕自身の2本の足で家路を急いでいる。

佐伯が気を悪くしたように言う。

「褒められてる気がしません」

その時、真っ赤なサイレンが、けたたましい警戒音を撒き散らしながら、雨粒に滲む視界の先に見える。のろのろと自動車達が道の脇へ避ける。出エジプト記さながらに真っ二つに割れた道路を、救急車が実に救急車らしく走り抜けていく。

救急車の向かう先は部長と坂本先輩の家がある。

事故に巻き込まれていなければ良いが……。

「あの一。フウフウ。先輩、おでの話聞いてまつか？ フーフー」

どうも僕が救急車を気にしている間にも佐伯は何か話していたらしい。

僕はいつでも正直者だから、素直に答える。

「聞いてない。なんの話だい」

「ブヒブヒ。部長の話でつよ。部長はきっと助かると思いまつよ。矢神さんの力は正真正銘本物でつから」

「僕の超能力だって本物だぞ」

その後しばらく、佐伯に超能力とは何たるか、超能力者が過去に受けた扱いとこれからの在り方について、とくとくと分かり易く講釈を垂れてやる事にする。

佐伯は適当に相槌を打っていたが、突然「うあ」と小さな声を出すと躓いて前のめりに転ぶ。

その拍子に、僕は背中からポンと放り出される。

運悪く、曲がり角からよたよたと不用意に出てきた人影に激突して、僕と僕にぶつかった憐れな影は、絡み合うように水溜りの中へ突っ込む。

老人である。

老人の持っていた傘が悲鳴を上げながら転がる。

佐伯は顔と言わず制服と言わず砂と泥を全身に浴びて泥団子になっている。

「ついません。大丈夫でつか」

佐伯が老人を起こそうと手を差し出す。

「うわああ！ 殺される！」

だが老人はその手を振り払うと、何か怖ろしいモノを見ているように恐怖の感情をありありと表情浮べ、気が触れたようにガタガタと歯を鳴らして叫んだ。

「殺される！ 助けてくれ」

「え、あ。違いまつ。落ち着いてください。おではそんな事ちませんよ」

「お願いだ殺さないで——何も見てない。わしは何も見ていない！」

「あわあ。落ち着いてくだつあい」

雨ゆえに人通りが少ないのは幸いである。

老人の狼狽振りは類を見ないほどだ。腰が抜けてしまったのか、立ち上がることさえせずに手足をじたばた振り命乞いをしている。

僕は全身を巡る激痛——主に超能力を使った後遺症——に耐えながら、そのやり取りを見ている。

否定する佐伯の言葉も耳に入っていない。

子供のように泣き喚めいている。

何が老人の身に起きたんだ。なぜそんなに怯えているのだ。

「わしは見てない。ただ通りがかっただけだ！ 見ちゃいない！」

見てない見てない見てない。わしは何も見ていない。だから命だけは助けて。

そんな言葉を繰り返している。

「よく僕らを見てください。ただの高校生です。いい加減落ち着いてください」

僕は水溜りに寝転がりながら、老人に話しかける。

僕の声が老人に届いた気配は無い。

老人をなだめてすかして安心させて、漸く落ち着かせると、僕たち三人は雨宿りをする事決めて、シャッターの閉まったタバコ屋の店先に座り込む。

足を引きずり、唇を青くした老人は、出来るだけ濡れないように奥へ転がり込む。老人は懐から湿気ったタバコを取り出すと火をつける。

疲れている。

三人とも疲れきっている。

僕は力を使ったから当然。騒ぐだけ騒いだ老人は言うに及ばず。佐伯は僕を背負ってここまで歩いてきた疲労と、勝手に僕らを人殺し扱いした老人を説得したからだろう。すでにうつらうつらと眠りかけている。

正直どんな状況でも眠れる才能は素晴らしいと思う。

分厚いビニールの軒先から、滝のように雨が流れて、躍動感溢れる水流の音が包み込んでいる。排水溝のコンクリートの蓋からゴボゴボと泡が弾けて、気が滅入る。

傍から見れば僕たちは実に奇妙な三人組に見えたらう。

だから僕らは多分雨に濡れる事なんてどうでもよくなっている。

雨の軽快なリズムが会話さえも奪い流していくように、暫く会話の無い時間が流れている。

やがて、老人がすまなさそうに口を開く。

「先程は申し訳ない」

「何があったんです？」

ああ、と老人は呟くとフッと煙を吐き出す。

「殺しだよ。殺しの現場を見ちまったんだ。わしは多分気付かれた」

さっきの救急車はひょっとして……

「全身黒づくめの男たちだった。ありゃあ堅気じゃあねえんだ。きつとな。わしは見ての通り、みすぼらしい宿無しさ。いつも空き缶を拾って小銭を稼いでる。雨が降り出す前、わしはいつもの様に空き缶を集めて回っていたんだ。表通りより裏通りの方が稼ぎが良いんでね、そっちへ行った」

「そして一一見てしまったと」

「ああ。そうさ。でもちゃんとは見てない。しっかりとは見ていないが、あれはそう、私刑だ。リンチに見えた。だから君らにあったとき、やつらに見つかったと思ったんだ」

と、老人はタバコを啜えたまま宙空を見つめている。

「やつらは死体をどこに片付けるか相談していた。わしは近くのゴミ箱の陰に隠れて、動けずにいた。動けば見つかるかもしれないから一一結局、奴らの一人がわしの傍を通り過ぎて、見つかったけれど」

きつとその光景を思い出しているのだろう。

老人はそのくしゃくしゃになった顔を伏せ、溜息を一つ。

しかしどこをどう見間違えたら一学生風情を傷の入った連中と間違えるのか。一一まあそれほど気が動転していたと解釈しておこう。

「何かを」

老人が言う。

「何かを出せと言っていた。そのリンチしてた連中」

「金、ですかね」

「最初はわしもそう思った。でも違うんだ。やつらが欲しがっていたのは金ではない。何かの権利書とかそういうものでもない。じゃあなんだ。いや、待てよ。あいつらに殺されたのは、……だとしたら」

もはや老人の話し相手は僕ではなかった。自分自身に問いかけている。僕はただそれを聞いているだけである。

老人は何かを思い出したようにポケットに手を突っ込み、がそそと探る。

佐伯はいつの間にか完全に眠っている。

「あった。これだ」

刃物である。刃渡り十五センチくらい、刃の厚みは五ミリ位か。柄は黒檀を思わせる材質だが、見た事もない奇妙な装飾が施されている。持ってみると結構重い。

「これは？」

「ごしんたい、だ」

「ごしんたい？」

「七神神社の御神体だ」

「ああ、御神体。しかし——なぜあなたが持っているんですか？」

「殺されたのはおそらく隆一。神社の神主だ。神主の矢神亮介とは旧知の仲でな。隆一は赤ん坊の頃から知ってる。亮介が死んでから、隆一の面倒を見ていた時期もあった。もう十年以上前になるが、わしは隆一に呼ばれて神社に行った。そのころわしにはちゃんと家もあり、妻が居て、生活があった。その時こいつをわしに渡して、言ったんだ。命を狙われていると。だからこの小刀を預かっていて欲しい。もしも自分の身に何か起きたら、もし矢神の身に何か起きたら……」

老人が言いよどむ。

じっと考え込んだ末、

「この小刀を……どうすれば良い？」

と言った。

「知りませんよ。そんな事……って。ん。あれ。今、矢神さんって言いませんでした？ その殺された人。七神神社の矢神さん？」

首を傾げる老人に僕は言う。

「そうだよ。今言ったばかりじゃないか。……でも確実じゃあない。なぜならわしは怖くてしっかり見ていなかったんだから。でも、今思い返してみると、ひょっとしたら矢神だったかもしれないってだけだ。命を狙われてるとか不穏な事を話していたしな」

老人は腕を組み、難しい顔をしている。

「だとしたら、その殺された人は多分矢神さんじゃないですよ」

矢神さんはついさっき部室で連絡を取り合ったばかりだ。僕は佐伯と矢神さんの関係、部長の身に起こっている出来事、矢神さんが部長につきまとう霊を祓ってくれると約束してくれた事を手短かに話す。

話をしている間に、老人の表情が安堵を見せる。

「そうか。六時過ぎに矢神に電話したのなら——確かにわしが見たアイツは矢神じゃないかもしれん。丁度君らが矢神と話していた時間なんだからな。しかし——やはり気になる。元気であるだろうか。見間違いならこれ以上の事はない」

「連絡を取りましょう」

「取りたいのは山々だが、生憎わしは、……」

と老人は自分のみすぼらしい身なりを指差す。

僕は頭を振って、大丈夫ですと伝える。そして幸せそうに眠っている男を指差す。

「幸いここで寝てる佐伯は矢神さんの電話番号を知っている事ですし、すぐ安否の確認取れますよ」

僕はさっき超能力を使った事を後悔し始めている。実は今老人と話している間にも体の節々が軋んで、痛みを訴えている。腕に力を入れようものなら、引きちぎってしまいたい程の衝動に駆られる。

でも今、この弱弱しい老人の姿を見ていたら、ふいに口から出たのである。

好きなのだ。結局。僕はこういう人を見ると助けずにはいられない。困っている人を放って心安らかに眠る事は出来ない。いらぬお世話と言われようとも、手を差し伸べずにはいられない。

「電話で安否を確認して、会いに行きましょう」

「ありがとう。すまないこんな老人に親切にしてくれて本当にありがとう」

老人の声に輝きが戻っている気がする。

佐伯はだらしなく涎をたらして眠っている。佐伯の肩を揺すりながら、

「佐伯。佐伯君起きろ」

まだ夢を見ているのか、うーんうーんと唸り声を上げて、寝返りを打つ。

何度も名前を呼び、体を揺らすが、佐伯はまるで起きる気配を見せない。

「さえきー。勝手に電話をかけるぞ」

佐伯はさっき矢神さんに電話しているはずだから、発信履歴に残っているだろうと思ったのだ。佐伯のポケットをまさぐると、果たして、携帯電話が出てきた。

ただし、水没していたが。通話口から文字盤からあらゆる穴、全ての隙間から、携帯電話の最期の叫びのように、ダバダバと雨水が流れ落ちる。

考えてみればこの雨である。

当然であり必然だ。

試しに電源ボタンを長押ししてみるが、画面が一瞬チカッと白くなったかと思うと、ビィィィと悲鳴をあげて黙ってしまった。

僕は言い難そうに語りかける。

「あのー」

老人は諦観の様相で、

「うん。言わずとも分かる」

と答える。

「会いに行きましょう。今すぐ。会いに行きましょう矢神さんに」

連絡が取れないのなら直接、と付け加えようとした矢先――

老人が終末を想像させるような狂気めいた奇怪な悲鳴をあげる。その双眸は、見てはならぬ何かを前に怯えきった小動物の様な色を宿して。

黒い服の男が二人、立っている。

傘を差す黒いライオン――

イメージである。

二人から漂う雰囲気は、檻から放たれたライオンのそれに似ている。すぐ襲い掛かってくるわけではないが、我が物顔でうろつき、好きな時に眠り好きな時に飯を食う。

そんな危うさに満ちている。

竦む僕らの前で二人は突っ立っているだけだ。

黒衣に似合わぬ真っ白な傘が、不気味に映える。

老人が動く。祈る様に頭を抱え、

「奴らだ――やっぱり追って来てたんだ」

呟くなり雨の中へ飛び出す。

黒服を避けて右へ。

「待て！」

黒服の男が手を伸ばす。

老人を抱え込むように捕らえる。

――殺される。老人が。

「逃げるんじゃあねえ」

殺意が含まれた一言である。

「離せ！」老人の肘が男の顔面を捉える。

男が小さくうめき声を上げ、のけぞる。

その隙に黒服の腕から老人はもがき抜け出す。

何かが光った。

光るものが老人の手に握られている。鈍く光る物が握られている。

小刀だ。刃先を小刻みに震わせながら、じりじりと後ずさる。

勿論刃の先には黒い男がいる。

腰を低く構え、柔道を思わせる動きで老人へ近づく。

「逃がすな」ともう一人の黒服が発破をかける。

そして――。

何の前触れも無く、

僕は下腹部に強烈な痛みを感じる。蹴られたのだ。蹴られた。

「ホームレスの知り合いか？」

男が問うと同時に、僕の顎に衝撃が――。

黒服の拳が握り締められている。殴られたのだと気付いた刹那、再び激痛が僕の脳を揺さぶる。容赦の無い二撃目。冷酷な意志が感じられた。

きっと、この男たちにとってはどちらでも一緒なのだ。

僕が彼らのリンチを知っていたとしても知らなかったとしても。

その打撃に手加減は感じられず、必要ならば最悪の事態さえ意に介さない。

そんな覚悟が見て取れる。

「なにするでつか！」

流石の佐伯もこの騒ぎで目を覚ましたらしい。

黒服の鎌を思わせる蹴りが佐伯の首を正確に切り裂く。

佐伯が吹き飛ぶ。汚れてすすけたコンクリートに頭を激しくぶつける。佐伯が小さなうめき声を上げる。

「あのホームレスの知り合いでないなら、今すぐどこへなりとも消えちまえ。俺たちだって無駄な仕事はしたくは無いだ」

無駄な仕事――。

即ち殺し――。

「うわあああッ」

と老人の悲鳴とも雄叫びともつかない声が響く。

老人は両手で柄を握り締め、濡れた地を蹴る。

黒服が右腕で急所をカバーする。

小刀が黒服の腕に突き立つ。

水溜りがうっすらと赤く染まっっていく。

痛みを感じていないのか。黒服は眉一つ動かさぬ能面のような貌の無い表情である。

黒服が渾身の力を込めて、老人の腹へ一発見舞うと、彼は紐の切れた操り人形のように崩れ落ち、その顔面によく磨かれた革靴がぶち当たり、老人は水溜りの中で胎児のような姿勢で「痛てエ！ 痛てエ」と泣いている。

黒服は腕に突き刺さった小刀を抜く。

そして、柄に施された装飾を見るやいなや、

「アニキ、持ってましたぜ」

と大手柄を取ったように言った。

アニキと呼ばれた男は、手渡された小刀をまじまじ観察し、

「ふーん。これがねえ。俺にはただの小刀に見えるが――矢神が言っていた事は本当だったのか？ おい、ホームレスのジジィ。おめえはコレが何なのか知ってるのか？」

老人は何かを話そうとして、ゲホゲホと咳き込む。

暫くして搾り出すように「知らない」と言った。

アニキが言う。

「本当だろうな」

「……本当だ。ただの刃物だろう？」

鈍い音。アニキの蹴りが、横たわる老人の顔面へ突き刺さる。

アニキは老人の表情をじっと見つめる。老人が嘘を言っているのかどうか探るように。暫く見つめたあと、

「なら宝の持ち腐れだ。お前が、さっき見たことを誰にも言わないって約束するなら見逃してやる。その代わり、コレはもらって行くぜ」

アニキが僕らを見回す。

「もし仮にお前が誰かに話たら、俺たちが全力で報復してやるから。命大事と思うなら墓の下まで持っていくんだな」

アニキと呼ばれた黒服は僕たちに一瞥くれると、立ち去る。

人の形をした悪意が立ち去ると、また世界は僕ら三人だけである。

湿度が街灯の灯り始めた世界を漂白していく。

時間が緩やかに減速を始める。行き場を失った時計の針は前進を諦めて、時間軸がx y zの座標に迷い込む。ゆっくりと慣性が終わるように、全てが止まった様に感じられる。 どうやら僕らは助かったらしい。

屋根の下に座り込み、佐伯と老人の無事を確認すると全身の力が抜けて蝟のような腑抜けになった。眩暈も覚える。

「矢神は――」

老人がノロノロと屋根の下まで這いよると、へたり込み、虚空に話しかける。

「矢神は死んだのか――」

自分自身を納得させるかのような呟きである。

「これで、わしの知り合いはみんな逝ってしまった」

雨が、降っている。沈黙が言葉を流す。

三次元に内包された四次元が、音を立てて割れる。

「佐伯君――」

「なんでしょう」

「矢神さんの連絡先、知らないか？」

どうしても、僕には矢神さんが死んだと思えない。勿論根拠は無い。だから確認したかった。

「分かりまつよ。……あれ。ケータイが壊れたみたいでつ……」

手には電源の入らない携帯電話が一つ。

「壊れまつた」

「うん。知ってる」

「でも、家に帰れば電話番号分かりまつよ。フーフー」

佐伯が重たそうに立ち上がる。

「さ、佐伯君と言ったかね。わしはもう何にも持たない老人だ。だからもう構わないでくれ。これ以上わしに関わって、奴等が危害を加えたとしても、どうする事も出来ない」

老人の言葉は僕らの耳に届かない。

佐伯が滴る雨水を拭い払うと

「乗りかかった船でつし、あながち無関係とも言えないでつし」

「そうそう。佐伯君のバイト先は、矢神さんなんですよ」

老人がはにかみながら黙る。

「じゃあ一度家に帰りまつ」

「運命さえも解き放ち、究極の恩恵を授ける

その意味を理解するものは奇妙な新世界を支配する」

突然である。。

二人きりになると、老人が何かを決意したように口を開いたのだ。

「え？ 何って？」

戸惑う僕に老人は言う。

「運命の槍の伝説に憑かれた連中／聖槍の騎士団という組織がかつてあった。いや、多分今もあるのだろう。そいつらの合言葉だ。

『運命さえも解き放ち、究極の恩恵を授ける その意味を理解するものは奇妙な新世界を支配する』とは、『4 2』と呼ばれる詩だ」

老人は意味不明な事を喋り始める。

「ちょ、ちょっと待ってください。何を言っているのか全然解らない」

「すまなかった。でもわしも最期かもしれん。だから、君に伝えておきたい。信じられぬ話。ガセネタと思うかもしれないが、それでも最後まで、聞いて欲しい」

僕はその真剣な瞳を拒絶する事が出来なかった。

「どこから話せば良いかな。

わしは、鍛冶職人だった。これでも名工と呼ばれるほどだったよ。腕は良かった。わしの打つ刃物は評判が良かった。今でもそれだけがわしの誇りだ。

1938年の夏から秋にかけてだったと思う。わしの元へ一人の男が尋ねて来た。ドイツ人で、高級そうな服を着ていた。軍人の様な物腰だったが、高慢ではない。理知的な雰囲気漂わせ、たった一人で我が家の門を叩いたのだ。後で知った事だが、彼は駐在武官として二年間日本に滞在した事もあったらしい。

名前はカール・エルンスト・ハウスホーファーと言った。

ナチスの外交顧問だ。

当時のドイツはオーストリアの併合、次いでミュンヘン会議によって、一層勢いづいてきていた。チェコスロバキアは解体され、チェコはドイツの保護国になった」

『ロンギヌスの槍を複製せよ』――

「――ロンギヌスの槍って知っているかい？」

「いえ。聞いたことないですね」

ロンギヌスの槍。

あるいは運命の槍。

ロンギヌスとは『槍を持つ者』の意だ。

ロンギヌスの槍とは『槍を持つ者の槍』即ち『持つべき者の槍』という意味合いだ。

現在ロンギヌスの槍／運命の槍はウィーンのホーフブルク宮殿に展示されている。

「ヒトラーは持っていたんだよ。ロンギヌスの槍を。ロンギヌスの槍だけじゃない。ホーフブルク宮殿の宝物を手に入れていたんだ。もともとヒトラーは画家志望だったから、芸術品に興味を示したんだろう。でも、ロンギヌスの槍についてだけは違う。ヒトラーは槍を手に入れて世界を支配しようと考えていた」

「馬鹿な事を――」

僕の口から出たその言葉は、妄言を吐く老人に対してか、それとも本当にそんな槍に世界征服を可能にする力があると信じたヒトラーに対してか。

老人はゆっくり深く頷く。

「こんな話がある。ヒトラーが槍に取りつかれた契機になった話だ。

ヒトラーは絶望していた。画家を夢見てウィーンへ上京したが、美術学校の入学資格が無かったため美術を学べず、建築学校にも入学を断わられた。そんな時、母が死んだ。

ヒトラーはホーフブルク宮殿へ足繁く通うようになる。無職、無学、肉親の死、描いた絵が金になるわけでもなく、専門知識を学ぶ事も出来ず、気を紛らわせるためだったのかもしれない。

そこで、ヒトラーは初めて槍に出会ったそうだ。

『絶望しているのなら、私を思い出せ。いつかお前は私を手に取り、世界を支配するだろう』／幻聴が聞こえた。槍が話しかけて来たそうだ。

以降、ヒトラーは歴史上に登場するようになる。即ち、ドイツ労働者党／ナチスを結成し、クーデターを企てる。

ミュンヘン一揆。

そして我が闘争。

ドイツ首相。

槍の力が本当だとしても偽物だとしても、想う力は強い。暗示と言い替えても良いかもしれない。ロンギヌスの槍が手元にあるのだから世界を支配する力を持っているという自己暗示だ」

「でも、第二次世界大戦でドイツは負けていますよ」

「七年だ。ヒトラーが槍を手にしてから七年でドイツ第三帝国は崩壊した。使い方だよ。ラジオを持っていてもチューニングの仕方を知らなければ、番組を聴けないだろう？ 何にだって使用方法がある。意味を理解していなかったからだ。ヒトラーはね。知らなかった。そして、実はヒトラーは槍を手にしていないんだ。槍の秘密、使い方を知っている人間が当時のナチスにいた。

一人は彼、ハウスホーファー。一人は、副大統領のルドルフ・ヘス。一人はゲシュタポの長官、ラインハルト・ハイドリッヒ。一人は大佐、マクシミリアン・ハルトマン。

同じ時期、聖槍の力に引き込まれた男がいた。

名をハインリヒ・ヒムラーと言う。ヒトラーが首相になると、ヒムラーは警察長官に任命される。実質的にナチスのナンバー2だ。そして、ヒムラーは大統領の席をひそかに狙うようになる。

ヒムラーは聖槍の騎士団を結成した。

ナチスの高官からなる組織で、いずれ槍を手に入れたときヒムラーの手足となるべき親衛隊であった。ヴェーヴェルスブルク城に居を構え、血の十三騎士団とも呼ばれた。

騎士団のシンボルは二つある。

さっき口にした『42』と言う詩は、誰が創ったのか判らない。そして、この詩が『42』と名づけられた理由も知らない。

でも、彼らは何故かこの言葉を象徴の一つとして掲げていた。

また、ヒムラーは騎士団の象徴としてロンギヌスの槍を掲げようと考えたが、しかし、騎士団を結成した時、聖なる槍は未だホーフブルク宮殿にあった。

ヒトラーを失脚させ、自分が総統になり、世界を手に入れる為の第一段階は槍を手に入れることだと考えたヒムラーは何としても槍を手に入れたかった。

チャンスは巡る。

オーストリアが併合された時、ヒトラーはホーフブルク宮殿にある宝物の移送をヒムラーとハイドリッヒに任せたのだ。

槍を手に入れるならこの時しかない。これ以前は宮殿に安置されており、これ以後は監視されてしまう。槍を手に入れるチャンスは今しかない。ヒムラーは恐らくそう考えた。槍を複製するのだ。

わしがドイツへ呼ばれたのはこの時だ。

ヒムラーは槍を誰にも知られず複製するため、秘密裏に有能な鍛冶職人を求めた。その相談を受けたのが、わしを訪ねてきたハウスホーファーだったのだ。

ハウスホーファーは日本に滞在している時分日本刀に興味を抱き、その関係でわしの噂を聞いたらしい。

日本人ならば怪しまれない。秘密が漏れる事もない。

わしはこの依頼を受け、槍の精巧な複製を作った。表面についた傷の一つ一つまで全くオリジナルと同じコピーだ。あまりにそっくりな為、どちらが本物か分からなくなる。わしは複製に印を入れるように頼まれた。

ふと、わしはロンギヌスの槍を手に入れることが出来るのではと考えた。

つまり、コピーを本物と偽り、二本のコピーを渡せば、ロンギヌスの槍を手に入れられるのではないか。

魔がさした。

わしはもう一本完全な複製を作った。二本目のコピーを作るチャンスはあった。わしは完成してしまった一本目に印をつけるのでは、本物と偽物がすぐばれてしまうと進言し、それが聞き入れられた。

偽物に付けられる印は、エルダーサインに決まった。五芒星だ。

槍を分解した際に刃先、刃の腹、付け根に合わせて五つの傷を付けた。これを星型に繋げれば五芒星になる。だが、完成したものに付けてしまっただけでは傷が目立ってしまい、怪しまれる可能性があると言ったのだ。

直ちに二本目を作るように命じられた。

わしは隙をみて、まず本物と一本目の複製をすり替えた。

そして建前上は偽物の、しかしその実本物の槍を手本にして二本目を打ったのだ。

勿論、一本目のコピーは二本目が完成し次第すぐ破棄するように命令が下った。向こうもそれなりに警戒はしていたのだろうが、わしは鍛冶のプロだ。そして彼らには鍛冶に関する知識は皆無だった。

わしは本物の槍を溶かしてナイフに作り変えた。

二本のコピーと姿を変えたオリジナル。破棄した事を証明するため、一本目の偽物を溶かした鉄と偽って、作成中に出た鉄くずを提出した。彼らに違いが判ろう筈もない。

ナイフに作り変えたロンギヌスの槍は、わしの祖父の代から受け継いだお守りだと嘘をついた。わしはドイツに来る前からこれを所有していたと騙した。

かくしてわしはまんまとロンギヌスの槍を手に入れたのだよ。

それから数年でドイツ第三帝国は崩壊した。1945年の事だ」

「その――槍は今どこに？」

「奪われた。さっき、奪われたよ」

日本に持ち帰ったロンギヌスの槍／ナイフは矢神さんに預けられた。当時はまだ日本は太平洋戦争の只中である。万が一この事実がばれて、日本軍に奪われる事を恐れたからである。神社の御神体としてこっそり置いておけば、手元に持っておくよりも安心だからと考えたそうだ。

事実、現代までナイフは御神体として七神神社で人知れず保管されていた。

老人は、深く溜息をつくと、

「あの時、本物も溶かして棄ててしまっていたら良かったよ。さっき話した聖槍の騎士団だが、ドイツの敗戦と共に解散したはずだが、今も残っているのだろうか。誰にも知られず。意志だけが受け継がれて、槍を手にして世界を征服しようとする黒い意志だけが数十年に渡って受け継がれているんだ。あれを狙ったのは多分そういう連中だ」

そういう連中だ、と老人は少し間を置いて繰り返す。

「矢神が本当に死んだのなら、わしは行かなきゃならん」

小声で呟く。

「どこへ？」

「……矢神のところだ」

それがどこを指すのか。

矢神の家か。

それとも死んだ矢神のいる場所――彼岸か。

老人はどこか寂しそうに笑う。



一度伊藤先輩の家まで向かっていたせいで、最終電車である。。

この分だと家に着くのは二十三時頃になるだろう。

くたくたに疲れた体で漸く我が家へ帰り着く。

門に掲げられた『佐伯』の表札の表面に雨水が流れて小さな滝を作っている。

玄関を開けると、家がピリピリと緊張している。

母親が靴を脱ぐのも待たずに居間から飛び出して、言う。

「矢神さんが！ 交通事故にあったって」

「事故？ 本当でつか？」

あの老人が見たのは、本当に――矢神さんだったんだ。

と改めて思い、そして気付く。

老人が言うには、矢神さんはリンチ――暴行を受けたと。

それが事故だって？

食い違っている。話が。

「今、市民病院へ運ばれて、それで、兎も角すぐ支度しなさい。車出すから」

「重態？」

「もう、駄目かも知れないって」

濡れた制服を脱ぎ捨てて、適当な服に着替える。すぐに車に乗り込んで病院へ向かう。矢神さんの神社で働き始めたのは、中学生の時である。父親が役所に勤めていて、例の祭りの関係で親しくなった。社会勉強にでもどうだい？ と、誘ってもらい、年に二度、盆と正月に手伝うようになった。

初めての仕事はお守りを売っている横で、手伝っていた。品物を運んだり、手渡したりしていた。高校に入学すると、バイト代が出るようになって、週に二回土日に手伝うようになった。男ながらも巫女として敷地内の清掃や盆踊りの準備など様々な仕事をした。

車は走る。病院へ一直線に。わき目も降らず。

病院へ到着し、車を降りる。

傘を差し、駐車場を急いで渡る。水が跳ねる。

エレベーターで矢神さんの病室へ。

登る。三階である。受付の三〇五が矢神さんの病室だと聞いた。

扉が開く。一步踏み出す。

瞬間、奇妙な違和感。異世界に踏み込んだような感覚。

気のせいだ。今は矢神さんの部屋へ。

五〇三号室の札が掲げられた病室は締め切りである。

扉の横に、矢神と書かれた札がある。

扉を開く――。

「ナニカ、用事デスカ？」

誰かにそう声をかけられる。

一瞬手を止める。扉はまだ開いていない。

扉の前にソファがある。白い、清潔な衛生的なソファだ。

そこに奇妙な男が座っている。

西洋風の彫りの深い顔立ち。どことなく、ミケランジェロ像を思い起こさせる均整の取れた体躯。年齢は三十後半であろう。

「用事ナイナラ、ハイラナイ方ガヨイヨ」

片言の日本語である。しかし、その声は奇妙に甲高い。異質な、名状しがたい不安感を掻き立てる声である。

「おでは矢神さんの神社で働いているんでつ。事故にあったと聞いて、そでで、……」

緊張のあまりか、意味不明の言葉がやっとの事で紡ぎだされる。

男はそれでも、怒るでもなく、諭すでもなく、事務的に「用事ナイナラ、ハイラナイ方ガイイヨ」と繰り返すばかりで埒があかない。

母がそこはかたなく漂う不穏な空気に、不安な表情を見せている。何？ この人、何を言っているの？ そんな思いを目配せで示す。

正直、不気味さが際立っている。この外人の。

夜の零時前、あと十分もすれば日付が変わる。

ここで、この男は一体何をしているんだ？ 当然の疑問である。

そうする内にも、この外人は、ハイラナイ方ガイイヨと話かけてくる。

曇りガラスの向こう側は、電気が消えている。中の様子はわからない。

――まで。

――待てよ。

落ち着け。おかしい。何故誰もいないんだ。

病院が異様に静かである。

誰かいるだろう。矢神さんは危篤なんだから。もう時間が無いかもしれないんだから。矢神さんの奥さんはどこに行った？ いるはずだろう。中だろうか。病室の中に。いや、いやいや。そもそも、矢神さんが交通事故だと母親に伝えた人物は誰だ？ 矢神さんの奥さんか？ ならば尚更ここにいななければいけない。電気が消えている。病室の電気が消えている。電気ぐらいはつけるだろう。おかしいだろう！ こんな時だぞ！ 最期を看取る人が誰もいないのか。

――そもそも、此処に矢神さんが本当にいるのかさえ怪しい。

表札は『矢神』だ。そして受付の夜勤の看護婦さんも矢神さんは此処だと言った。そこにもう一つの違和感がある。先程感じた違和感だ。

何かが違っている。

結局扉を開ける勇気は生まれなかった。不気味な外人を後にし、病院を出る。そして思い出す。電話をかけていなかった事に。電話をしなければ。伊藤先輩と、矢神さんを待っているはずの部長に。

公衆電話は病院の出入り口に二つ設置されている。まず部長の携帯電話に連絡を取る。しかし

駄目。出ない。次に、一緒にいるはずの坂本先輩へ電話をかけてみる。

「もしもし、佐伯でつけど、矢神さんは今日そっちへ行けないかもしれないでつ」

「ん。どういうこと？」

坂本先輩の声は密やかだ。

迷った。妙な外人、違和感。正直に話すべきだろうか。しかし、一瞬の迷いの末一番理解出来た原因を話す。

即ち――。

「矢神さんは交通事故に合ったらしいでつ」

視線を感じる。誰かの視線を感じる。

母は車に戻っている。車内に影が見える。母の影が。

坂本先輩が電話口で、声をひそめて「佐伯君、それって本当？ 間違いないんだね？」と聞き返す。

「ほ。ほんとうでつ。フーフー」

汗が額から垂れる。じわっと体が熱くなる。体が、本能が警戒しろと訴える。

何かに、いや、誰かにこの会話が聞かれている。

そんな第六感ともいえる感覚がよぎる。

「でつから、今日は矢神さんはそちらに行けないでつ」

「デンワ、カケナイハウガイイヨ」

振り返ると、五メートル離れた植木の煉瓦に腰掛ける、奇怪な男が一人。

「デンワ、カケナイハウガイイヨ。コノコト、ダレニモダマッテイルハウガイイヨ」

黒いコート、男にしては長めの髪、両手をコートのポケットに突っ込んで、じいっとこちらを凝視して、聞こえるか聞こえないかのギリギリの声で、繰り返す。

デンワ、カケナイハウガイイヨ――。

「もしもし、どうしたの？ 今病院？」

「そ、そうでつ。おではもうつこし、矢神さんの傍にいる事にしまつ」

電話を切る。

伊藤先輩にも電話する必要がある。だが、今背後に座っているこの神妙不可思議な男、何者だろう。――いつ危害を加えてくるかも知れないこの怪しい男。

改めて病院を見やる。

一階の受付のライトがぼんやり光るだけで、暗い。夜の学校、夜の病院、人の集まる場所に人の気配が無いというのは、異界めいた恐怖を感じる。暗闇からほのめかされるその不安感――。

耐えられない。不安は遂に限界に達し、この不安に背を向ける。

変な男の視線を感じながら、車へ向かう。

電話なら家に帰ってからでも掛けられる。何も今じゃなくたって。必死に自分自身に言い訳しながら、車に乗る。



俺は、ここまで伊藤先輩と佐伯の話を聞いてある事に気がついた。

ここにいる俺達の誰一人矢神さんの死を確認していないのだ。

真実、俺達は矢神さんの顔すら知らない。唯一知っているのは、佐伯だけだが、佐伯は危篤の矢神さんと会うことが出来ずにいた。

少し思い出すことを補足しておこう。

矢神さんの死は、世間的には交通事故として片付けられた。

土砂降りの雨だったから運転手の方も視界が悪い。誤って矢神さんを轢いてしまったと言う。そんな話を矢神さんの死から数日後に佐伯から聞いた。

そして哀しい事に、矢神さんとその細君の葬式は遂に行われなかったのだという。

いつの間にか矢神さんの死は、俺達の間で禁忌になっていた。

◆
七神神社は街の中にある。自然体で。溶け込んでいる。風景に。

街を歩けばふと見かける神社、そんな印象だった。

今は誰もいない。神社には勿論、それなりの厳かな雰囲気は残っているが、周囲が明るいせいか、それとも手垢がついているのか、考えていたよりも不気味ではなかった。

気合で此処まで歩いてきたが、両足の関節が悲鳴をあげている。痛い。

漸々石段を登りきると、僕は「もう歩けませーん」と自分でも情けない声を上げる。

来る途中に寄ったコンビニで買った傘を投げ出す。もともとずぶ濡れだったから今更傘差して服が乾くわけでもあるまい。

「若いのに……」

老人が言う。

「僕はねえ超能力者なんです。体力無いんです。それに一度力を使うと、全身が筋肉痛になってあばばばばあぁ」腰を捻った。激痛で妙な言語が飛び出す。

「流行ってるのかい？」

「ん。何が？」

「超能力ってやつだよ」

「流行廃りもありゃしませんよ。僕が本物ってだけです。政府に見つかったら実験されちゃうかも」

「わしにはよく分からんが……体は大事にせんといかんよ——矢神の家は神社の奥にあるから、もう少し頑張って歩いておくれ」

老人が遠まわしに急かす。僕は下半身に力を入れて立ち上がる。

気配は無い。人の気配は。僕ら二人の他には。誰一人の気配も。時折通り過ぎていく車のヘッドライトがスーッと流れていく。信号は赤から青へ、そしてまた赤に。ブレーキの音が聞こえて、やがてまたエンジンを噴かす音が響く。

「夜分にすみません——誰か、いらっしゃいますか？」

老人が家屋の玄関らしき引き戸を叩く。しかし返事は無い。

「駄目だ。誰もいないみたいだ」

老人が肩を落とす。

僕は携帯電話を取り出して、佐伯の自宅の電話番号を選択する。

何度かコール音が鳴る。

「はい。佐伯です」

女性の声が聞こえる。多分佐伯の母親だろう。佐伯に代わって貰うように頼むが、まだ帰ってきていないとの事だ。

時計を見る。確かに佐伯と別れてから三十分しか経っていない。佐伯の家は存外に遠いから、恐らく今電車の中なのだろう。

僕は適当に挨拶して、電話を切った。

「佐伯はまだ家に着いていないみたいです」

「そうか」

「どうしましょう」

「どうしようなあ。正直に言うと、わしは、あの槍を日本に持ち込んだ事を後悔しているよ。なんとしても取り返して破壊しようと思う。けれど――」

手掛かりが何一つ無い。困った。

立っているのも辛いので、僕は賽銭箱の前に座る。丁度境内の屋根のおかげであまり濡れていない。老人が最近の若者は神社を何だと思ってるんだ、と嘆いているがまるで気にしない。

「罰当たりだぞ。賽銭箱の前に座るなんて……」

老人がおや？ と顔をしかめる。

「賽銭箱、賽銭箱か……」と呟く。

「なあ。賽銭箱の中に、何が入ってる？」

「何って、そりゃあ小銭じゃないですか？ 賽銭箱だし。お札入れる人も……いない訳じゃないでしょうけど」

「そうじゃなくて、それ、なんだ？」

それ？ 老人が指を指す。

僕は賽銭箱を見上げる（座っているから、位置的に賽銭箱は僕の後頭部辺りにある）。何の変哲も無い賽銭箱らしい賽銭箱だ。

老人が歩み寄る。賽銭箱を覗き込む。

目を見開き仰け反る。

「どうしたんですか？」

「――見れば、分かる」

老人がうっと小さなうめき声を上げて口を塞ぐ。明後日の方向を見て、深呼吸を一つ、二つした。

「何があるんです？」

立ち上がり、賽銭箱を覗き込めば――、

賽銭箱の四隅にきっちりと、パズルを組み立てるように、何かが、かつて動いて息していたはずの何かが、アレが、ソレが、バラバラだ。

バラバラだ。腕が、脚が、内臓が、骨が――。びっしりと。

隠されていながらにして――意図的な悪意を込めた、いや皮肉か――誰かに見つけられるために隠された。目的は――衆目に晒される必要はないが、見るものだけは克目してみよ。そう言わばばかりの悪意が。――でも、とてもじゃないが見れたもんじゃない。

つまり、

つまり――だから――。

「これは死体だ」

女性の。

何処かで犬が吠える。空が泣く。

肌寒い冷気が、流れる。

――誰の死体だ？

賽銭箱の中心に頭がある。敷き詰められた肉の絨毯、否、座布団に鎮座しているのは、髪をザンバラに掻き乱した中年女性の顔である。木魚のようだ。

両目をカッと見開き、勿論まばたきなんてしない。

「幸子さん……が、なぜこんな事に」

「誰です？」

「隆一の。矢神隆一の奥さんだ」

既に殺されている。誰に殺された？

「あいつらでしょうか。さっきの黒服の」

当然、既に矢神さんは殺されているだろう――。

ふいに視界の隅にちらりと映る幸子さんの顔が――。

この状況。矢神さんが生きている方がむしろ不自然ですらある。

僕の体が震えている。寒さからでも、死体を見たからでもない。

気付いたのだ。

正常と異常、正気と狂気、常識と非常識、オカルトとアンチオカルト。僕の中にある観念的な何かが悪転し始めている事実。真偽の知れない、妖しげな槍。矢神さんの死。胡散臭い組織。そしてそれに関わっているだろうと思われる、奇妙な連中。全てが信じられない。かと言って、嘘だと切り捨てる事も出来ない。

そして僕は、この奇怪な夜に慣れ始めている。

雨が。雨が悪夢を流してくれるだろうか。

――何を考えているのだ僕は。雨はこの事件に一切関係ないじゃないか。

「いや、違う。この雨が悪夢を産むんだ」

――何を言っているのだ。僕は。誰に向けて言っているのか。

僕は人智を超える何か、責任を押し付けなければ、ならぬほど錯乱している。

自覚がある。自覚すればするほど、壊れていく気がする。

僕は雨の中へ飛び出す。胃液が口に染みるのだ。胃の内容物を木陰に撒き散らす。撒き散らしながら考える。僕が正気を取り戻すために。

もう一度、僕が僕であるために。

例えば運命や天命。これが矢神幸代さんの、矢神隆一さんの『運命』だったのだ、と人間では制御のきかない何かのせいにするのは容易だ。

こんな理不尽な出来事を、僕は何も見なかった。だから関係ないとする事は容易だ。

それで終わりだ。

でも犯人を知っているじゃないか。僕は。個人の素性は知らなくても、この行為を行った連中が誰なのか知っているじゃないか。

さっき出会ったじゃないか。殴られたじゃないか。

『普通』ならどうするだろう。こんな時。

連絡するだろう。警察に。

通報しよう。

思うが早いか、僕は雨の中受話器を口にあて、110番を押す。

すぐ誠実そうな若い男性の声が聞こえる。

「はい、警察です。どうしたんですか？」

「さ、殺人事件です。神社に死体が……」

「状況を教えてもらえますか」

ありのままに話す。神社に来たら、賽銭箱の中に死体があった。

「申し訳ありませんが、少々お待ちください、上の者に代わりますので」

若い男の次に電話越しに出たのは、渋い声の男である。

「概要はききました。場所をもう一度お願いできますか？」

「七神神社です」

「少々お待ちください」

少々待て？ 何かおかしくないか？

一分ほどだろうか、また別の男性が電話に出る。今度はもっと老齡だ。

そして、驚くべき事を口にする。

「七神神社で女性が亡くなっているという話ですが、そんなはずはありません。何かの見間違いじゃないですか？」

見間違い？

「そんなはずは無いて、どうやって確認したんですか！ だって今、目の前に――」

「悪戯は程ほどにしておきなよ」

警察官がフゥと溜息をつく。そして、勝手に電話を切ってしまった。

――もう何も聞こえない。

嘘が真で真が嘘で。

そう思ったら、なぜか急に涙が出てきた。

◆
「ロンギヌスの槍が人を狂わせる。槍の力を、本気で信じている輩は確実にいる。警察を責めるんじゃない。彼らは職務を忠実にこなしているだけだ。ただ、一般市民の平和を守る大儀名分じゃなくて、今回はヤツラの利益の為に職務をこなしただけだ——だから」

老人が僕の頭に手を置く。温かい。掌の温もりが。

そして優しい声で老人は言う。

「もう泣くな。どうしようもない事ってのはやっぱりある」

曇り空が土砂降りの雨を運ぶ。役立たずの天才たる僕を象徴するように。

僕らは矢神さんの家の裏口から屋内に入る。鍵は植木鉢の下にあった。老人が、昔からかわらねえな。無用心にも程があるよと、ぼやきながら座敷に座る。

「いつまでもここにいるわけには行かないけれど、誰かが来たら勘違いされるだろうし。十五分だけ休憩しよう。お茶でも飲め。飲んだら、伊藤君は家に帰ったほうが良い」

言って、台所で湯を沸かしている。

僕らが此処に来た事を警察に連絡したから、恐らく情報は例のやつらの耳にも入っているだろう。警察か、それとも連中か。どちらにせよ長居は出来ない。

僕は畳の上にごろりと横になる。壁に掛けられた時計が二十三時半を指した。腕を枕にして、何気なくちゃぶ台の下を見やると、一枚の封筒が落ちている。

茶色の封筒で、封が切られている。ちょっとした興味で中を覗いてみる。

何かの請求書である。意外に厚みがあって、十枚近く重なっている。

一枚目にはなんとか言う神具が云万円。取引先の名称やなんかが書かれている。

あまり覗き見るのも悪かろうと、僕は請求書を封筒にしまう。が、誤ってバラバラと撒き散らしてしまった。紙の角が僕の顔に当たり、少し痛い。

「いけね」

慌てて体を起こし、請求書を整頓する。

その中に一枚だけ他と違う紙がある事に気がつく。藁半紙に殴り書きされたその内容を一読する。宛名が誰かは書かれていない。用件だけが、一つ。しかし、明らかに老人へ宛てた手紙であろう事は分かる。

『君に本物は渡していない。本物は初めて受け取った場所に』

「お茶、出来たぞ」

湯飲みを二つ運んできた老人が足を止める。

窓の外には、赤い光が明滅している。神社の入り口の石段を登る気配が迫る。

老人が「来たか」と言う。

今警察に捕まると、面倒な事になる。

「急いで裏から逃げろ。伊藤君」

僕は例の紙を渡す。と同時に内容を伝える。

「心当たりは――」

「――ある。しかし、流石矢神の息子だ。用心深い。わしに渡したのは偽物だったのか。数十年前、元神主の矢神亮介に聖槍を渡したのは、丁度この部屋だ――。上手いな。あちこちに隠したように見せかけて、その実、槍は初めから此処にあったんだ」

槍はずっと此処に。

「逃げろ。伊藤君。見つかる前に」

「――すいません。僕が警察に電話なんてするから」

老人は首を振る。

「誰だってそうする。わしだって。だから君は悪くない。誰だって警察が連中を買収されているなんて考えやしないさ。逃げろ。でも――最後に頼みたい事がある。槍を破壊してくれ。もしも破壊出来なければ、誰にも分からない場所に棄ててくれないか」

最後。嫌な言葉だ。

「君が逃げられるように、わしが時間を稼ぐ」

「稼ぐってどうやって？ 警察はもうすぐそこに」

「わしが出て行って捕まってくるよ。警察に。案外一人でフラフラしているよりも安全かもしれないしな」

警察さえ買収されている。

僕も、老人も分かっていた。頭のどこかでは。

しかし改めて口にされると――現実になる気がして。僕は「最後なんて悲しい事を言わないで下さい」と伝える。

複数の足音が聞こえる。人々の影が窓越しに通り過ぎる。

話声が聞こえる。どうやら死体を見つけたようだ。

老人が身を屈める。

「矢神の事だ。あいつとは子供の頃からの付き合いだ。槍の隠し場所は」

そろりと押入れを開ける。中には布団や小物が雑然としまわれている。そこに紛れて、三段の引き出しがある。

一段目にはキーホルダーやら、指輪やら、ただの小物が適当に並んでいる。二段目には家電の説明書が突っ込んであった。三段目は工具である。つまり、ニッパーやナットやドライバー、金槌など等。文具も紛れている。ハサミもカッターもある。老人は三段目を引き出すと、畳に空ける。

何個か物色して手にしたのは、白い布に包まれた小刀である。

「……これだ」

刃だけである。柄は無い。恐らく柄は老人が渡された――そして奪われた――小刀に装着されていたのだろう。

老人は再び刃を布で包み、俺に渡す。

「頼む」

老人の目が、澄んでいる。確固たる意志を感じる。

目を逸らす。

何故だろう。何故僕は目を逸らしたんだろう。

「だけどー必ずもう一度会いましょう」

裏口を開ける。

雨風が吹き込む。そして、それは僕が此処から逃げ出すために好条件であった。

僕は神社を取り囲む石の柵を飛び越え、水溜りを越える。ポケットに突っ込んだ運命の槍の重みを感じながら、これを棄てる場所を探す。

山がいいだろうか。人目につかない山に棄てれば良いだろうか。

海がいいだろうか。深い海の底に投げ捨てて、誰にも見つからない海の底に。

もっと良い方法がある。僕にしか出来ない方法だ。

全身を激痛が貫く。足がもつれて、僕は地を這う。

それでも、歩みを止めるわけにはいかない。

神社を振り返る。

雨の向こうに、パトカーの点滅が。憂鬱そうに輝いている。

何が起きたかなんて、考えたくない。が考えてしまうのが人間だ。

――結局僕は、あの老人の名前を聞いていない。

老人は言った。

「わしは、あの槍を日本に持ち込んだ事を後悔している」と。

――本当にこの槍に世界を支配する魔力があるのなら。

あなたの選択は正しい。あなたがその時、槍をすり替えなければ、今頃世界の国々は――想像する事さえ困難な世界になっていただろう。ナチスの理想の具現化した世界だ。

だからあなたは間違っていない。

誰も知らない。実はあなたがドイツに召喚された時に、世界の命運があなたの手に握られていた事なんて。あなた自身でさえも。

別れてから繰り返す、僕の心をよぎる幾つもの言葉が。

――本当にこの槍に世界を支配する魔力があるのなら。

今の時代に英雄がいるとすれば、それはあの名前を知らぬ老人だ。

ただ、彼に授けられるべき勲章は、誰かの溜息一つで千切れてしまうほど儂い。

ありがとう。ごめんなさい。そしてさようなら。

どんな言葉でも、僕の知る全ての言葉を以ってしても言い尽くせない。

きっと本当の革命は、理論も思想も無い。

しかしそこには感情がある。

数十億の感情が。

――本当にこの槍に世界を支配する魔力があるのなら。

魔が差した、と言う老人の言葉。

老人はきっとその時何か――数十億の感情――に突き動かされたのだろう。

或いはそれこそが運命の槍の思し召しか。

名前を知らない老人。

あなたはそっと静かに革命を起こしたんだ。

数十億の感情を抱いて。

数十億の感情が、老人にすり替えを起こさせたのならば。

だから、僕は、

――街灯の街並みは灰色で、湿度だけが支配している。

だから、僕はただ走る。

どこへ向かうかなんて分からぬまま。しかし歩みを止める事は許されない。老人の意志を実現するためには、立ち止まれない。

――本当にこの槍に世界を支配する魔力があるのなら。

僕は槍を破棄するに適した場所を探して。

あの名を知らぬ老人の意志を実現するために。

――走る。

何度も転ぶ。転がり、傷つく。身体から感覚が失われていく。全身に力が入る感覚が。急速に溶けていく。抜けてしまう。

やめよう。もう駄目だ。やめてしまおう。

何度か思う。でも、その度、想いが胸を燻る、無名の彼の、あなたの意志が――走らせる。僕を。

冷えた両手に握り締めるナイフの先端。

辿り着いたのは、人気の無い駐車場である。

数年前に突然出来た大型量販店の駐車場である。突然生まれて、そして一気に客を集めたあと、大きな火事を起こした。夏の真昼の火事である。

客は逃げ惑う。店員も逃げ惑う。

建て直したが、客足は遠のいて、いつか店を閉めてしまった。

だから今は廃墟である。

其処には何も無いと誰もが目を背け、忘れられた廃墟である。

街中にあるからか、廃墟で見かける怖い人たちはあまり寄らない。

沈黙の支配する廃墟は無論明かりさえなく、僕は駐車場の車止めに腰掛ける。

制服の上着を脱ぐ。

取り出したロンギヌスの槍を足元に置く。

――本当にこの槍に世界を支配する魔力があるのなら。

消し去るんだ。

絶対的な感情の槍を。

――本当にこの槍に世界を支配する魔力があるのなら。

支配の渦を。

――本当にこの槍に世界を支配する魔力があるのなら。

あの老人が身を呈して封印したがっていたこの槍を。

――本当にこの槍に世界を支配する魔力があるのなら。

僕の無意味なこの力が一体何のためにあるのか。

土を掘れば、掘った分だけ不要な土が出る。

僕がこの超能力で穴を空けると、何も残らない。

この三次元から消える。

深呼吸は二つ半――両手を槍の刃のその上にかざす。

血液の逆流する感覚。

痛みを伴う祈り。

伽藍堂の建造物は冷気を流し込み、僕は、これまで体験した事の無いほどの集中力で槍の置いてある空間目掛けて穴を――。

コツコツと足音が聞こえる。

狂ったような音を上げて、風が吹き込む。

何処かで猫の鳴き声が聞こえて、僕は目を覚ます。

モウナイヨーー。

片言の日本語が聞こえる。

それから、近くではないが、それほど遠くも無い場所でブツブツと日本語ではない別の言語で会話がなされている。

僕の体もう動かない。

本当に。指の一本さえも。



伊藤先輩が語り終えると、俺達の間には沈黙だけが生まれた。

誰も何も言わない。

俺は既に冷め切ってしまったコーヒを口に含む。

ふと視線を感じる。

店長である。店長がじっと俺達を見ている。

何か言いたそうに。相変らずの無愛想な顔で。

ーりん。と鈴が店内に響き渡る。

店中の注目が入り口に向けられる。

そこには平野香織その人が立っていた。

背筋を伸ばした綺麗な姿勢で、かつての部長の面影を残しているが、鬼気迫る雰囲気漂わせながら、俺達の席へと足を進める。

「久しぶりっ」

声は明るく、だが演技をしている様にも見える。

「香織！」

坂本先輩が名前を呼ぶ。

「もうエスパー伊藤の話は終わった？」

部長が椅子に座りながら言う。

「たった今終わりました」

伊藤先輩が答えると、部長は何かを企んでいる様に、ふむふむと頷く。

「ご注文は？ 何にしましょうか」

普段は愛想の良い奥さんが、注文を聞きに来る。

今は、伊藤先輩と佐伯の話が聞こえていたのだろう。少し戸惑いがちで、どこかよそよそしい。あくまで仕事だから注文を聞きに来たという感じである。

部長はじっと奥さんの顔を覗き込む。

奥さんの瞳に妙な動揺が伺える。確かに伊藤先輩の話は尋常な話ではなかった。

けれど何かが違っている。伊藤先輩の話を小耳に挟んだから、生まれた動揺ではないような気がする。

「店長をここへお願い。話したいことがあるの」

きっぱりとした口調で部長が言った。

店の奥から、強張った表情で主人が現れる。

「何か不都合でも御座いましたか？」

型通りの言葉を口にする。部長は黙ったまま腕を組んで、じっと見据えている。

「あの……」

と再び店長が訊ねる素振りを見せると、

「私は、」

と部長がそれを制する様に口を開いた。

「私は、本当の事が知りたい。ただそれだけなの」

俺は鬼気迫る部長から目を逸らす。落ち着かない。ふと、壁に沿って置かれている高級そうな棚に目が行った。アットホームな店の雰囲気作りに置かれた棚だ。

綺麗な木目の上に、一つの詩が置いてある。

『運命さえも解き放ち、究極の恩恵を授ける。

その意味を理解するものは奇妙な新世界を支配する』

『42』が掲げられている。すると、まさか。

「本当の話、と言いますと……」

店長は作り笑顔で目が笑っていない。

部長が店長を睨む。

「とぼけないで。つまり。あなた達、聖槍の騎士団の――」

店長が目を見張り、そして諦めの声を出す。

「――もう足は洗いました。今は――騎士団とは何の繋がりもありません」

「でも、過去は消せない。私達は、この事を誰にも話さない。だから、あなたの口から言ってください」

「何を？」

「矢神さんを殺した犯人は誰かってことを」

店長が何かを言おうとして、しかし口をつぐむ。

俺は漸く、部長が皆をこの喫茶店に集めたのか、分かった気がする。

俺達はずっと、矢神さんを殺した犯人の横で、殺された矢神さんの話をしていたのだ。そして、俺達はずっと、元聖槍の騎士団の横でロンギヌスの槍の話をしていたのだ。

「やっぱり、どこかであった事がある様な気がしたのは――」

――伊藤先輩の声には悲しみと怒りと怖れとその他様々な感情が混ざり合っている。

「気のせいじゃなかったですね。伊藤さんを殴ったのはわたしです」

店長が言う。そしてその言葉の真意は――。

「店長が殺したんでつか」

佐伯の言葉は断定的な意味を含む。

「……わたしが殺しました」

告白。もう言い逃れは出来ぬと悟ったか。店長はあっさりと認めた。

「でも、罪の意識を感じているから、聖槍の騎士団との縁を切って田舎で喫茶店をしているんです。矢神の命日になれば、毎年墓に参って、殺した事を悔いています。本当は、本来ならば罪を償うなら警察へ出頭するべきなんでしょうけど。警察にはヤツラの息がかかっています。自首すれば、わたしに待っているのは死です。間違いなく消されます。それでは矢神を弔えないし、

何より、……」

「わかった。もういい」

部長はそう言うと席を立つ。

◆
なぜかは問わないで。

どうしてかも問わないで。

それは多分聞いてもしょうがない事だから。と、部長は言う。

部長はそれだけ言うと、再びどこかに行ってしまった。さようならの言葉さえ告げることなく。まるで明日も会えるかのように。名残もなく去ってしまった。

でも次に部長に会えるのは、きっと数年、ひょっとしたら何十年も未来の事かも知れない。俺達は、すっきりしないものを胸に抱えたまま、部長の後を追う様に店を出る。

早足で歩く部長の背中が、改札の向こうの人ごみに消えた。

突き抜けるように青い空。雲ひとつない。蒼穹。

ふと、ルーシー・モノストーンの名曲「Strange New World」の歌詞を思い出した。

奇妙な新世界——けれども同じ青い空。

駅のホームに電車が止まる。人が流れる。流れる。流れる人の中に、いつか出会った老人を見つけた。電車から押し出されるように飛び出して、相変らずぼろきれを纏い、風呂には数ヶ月以上入っていないのだろう。彼はよろよろと流される。流されながら俺と目が合う。

「伊藤先輩、俺、ふと思ったんですけど、……」

「ん？」

「俺もその老人に、先輩が話してくれた老人に会った事があるかもしれないんです」

老人は人ごみに紛れて遥か彼方へ。そして俺達は電車の車両に乗る。

ふと見上げた吊り広告にでかでかところ書かれていた。

『よんじゅうに』

よんじゅうに、と言う本の宣伝である。そして俺は、老人のある言葉を思い出す。

『俺は最近知ったのだ。いつか空が引っくり返って、星が落ちてくるんだ』

四十二。空がひっくり返る。逆転。反転。運命さえも解き放ち、究極の恩恵を授ける。その意味を理解するものは奇妙な新世界を支配する。42。四十二、42、星が落ちる。彗星、究極の恩恵。猟奇染みた賽銭箱の死体。

ああ——。

そういう事か。だからあの時老人は——。

俺はこの符号から漸くロンギヌスの槍の意味を理解した。

でも、俺の理解が正しいとすれば、それはあまりにも衝撃的過ぎる。

永久に俺の心の中に閉まっておこう。

そうすれば明日からもいつもと変わらない、毎日がやってくるのだから。

〈奇妙な世界なのに青い空 了〉